

構井・阿弥陀堂遺跡 上原城下町遺跡

—平成26年度 諏訪湖流域下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016

茅野市教育委員会

構井・阿弥陀堂遺跡 上原城下町遺跡

—平成 26 年度 諏訪湖流域下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016

茅野市教育委員会

序 文

八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰高原に抱かれた長野県南東部にある茅野市は、豊かな自然に育まれた風光明媚な高原都市です。茅野市は国特別史跡の尖石遺跡、国史跡の上之段遺跡・駒形遺跡をはじめとする多くの縄文時代の遺跡や、2体の国宝土偶（縄文のビーナス・仮面の女神）を保有するなど、日本の縄文文化を代表する優れた縄文文化がこの地に花開いた場所です。縄文時代の古くから人が住み始め、その痕跡は市内の広範囲に渡って残されています。長年の調査の積み重ねにより、連続した人の生活の様子が明らかになりつつあります。

この度、発掘調査を行った構井・阿弥陀堂遺跡、上原城下町遺跡は近年の開発により幾度となく発掘調査をしている遺跡です。茅野駅にも近く、早くから市街地化が進んだ場所であったため、大規模な調査が進んでいませんでした。構井・阿弥陀堂遺跡は縄文時代から平安時代にかけての大きな集落遺跡であり、上原城下町遺跡は中世の城下町として多くの人々が生活していました。

今回の調査では、下水道工事ということで長い距離の調査を行いました。二遺跡の遺跡同士が接する場所での比較的広い調査を行えたことで、遺跡の広がりや遺構の残り具合が確認できました。市街地となっても地中には多くの遺構が残っていることが判明し、好立地と言われる場所でのさらなる慎重な調査の必要性が生じていると感じています。また、その成果が考古学、郷土研究に活用されることを切に願います。

最後になりますが、発掘調査の実施にあたりまして、諏訪建設事務所をはじめとする工事関係者の皆さまから遺跡の保護に対するご理解とご協力を賜り、円滑に調査を進めることができましたことを心からお礼申し上げます。また、発掘調査に従事された作業員の皆さまに感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

茅野市教育委員会
教育長 牛山英彦

例 言

1. 本書は平成 26 年度に実施した諏訪湖流域下水道工事に伴う長野県茅野市ちの塚原所在の構井・阿弥陀堂遺跡、ちの上原所在の上原城下町遺跡に係る発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は諏訪建設事務所長田代幸雄氏の委託を受け、茅野市教育委員会が行った。
3. 発掘調査および整理事業・報告書作成は以下の期間に実施した。
試掘調査 平成 26 年 1 月 22 日～24 日
本 調 査 平成 26 年 6 月 9 日～7 月 4 日（第一期）
平成 26 年 9 月 26 日～10 月 31 日（第二期）
整理事業および報告書作成 平成 27 年 9 月 1 日～平成 28 年 2 月 8 日
4. 発掘調査における委託業務は以下の業者に委託した。
基準点測量 株式会社両角測量
5. 発掘調査に関わる出土品、諸記録等は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管されている。
6. 発掘調査は茅野市教育委員会事務局文化財課が実施した。組織は以下のとおりである。
①調査主体者 牛山英彦（教育長）
②事務局 木川亮一（生涯学習部長）
③文化財課 守矢昌文（文化財課長兼尖石縄文考古館長） 小池岳史（考古館係長）
小林深志（文化財係長） 功刀司 山科哲 大月三千代 鵜飼幸雄 塩澤恭輔
④調査担当 塩澤恭輔（発掘調査・整理事業・報告書担当）
⑤発掘調査・整理事業参加者
補助員 武居八千代 酒井みさを 立岩貴江子 大勝弘子
作業員 後藤信一

凡 例

- 1 本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。
- 2 挿図における遺構の略号は以下のとおりである。
① 1 号住居址 → 1 住 ② 1 号土坑 → 1 土 など。
- 3 本書における土層の色調は、『標準土色帖』を参照した。

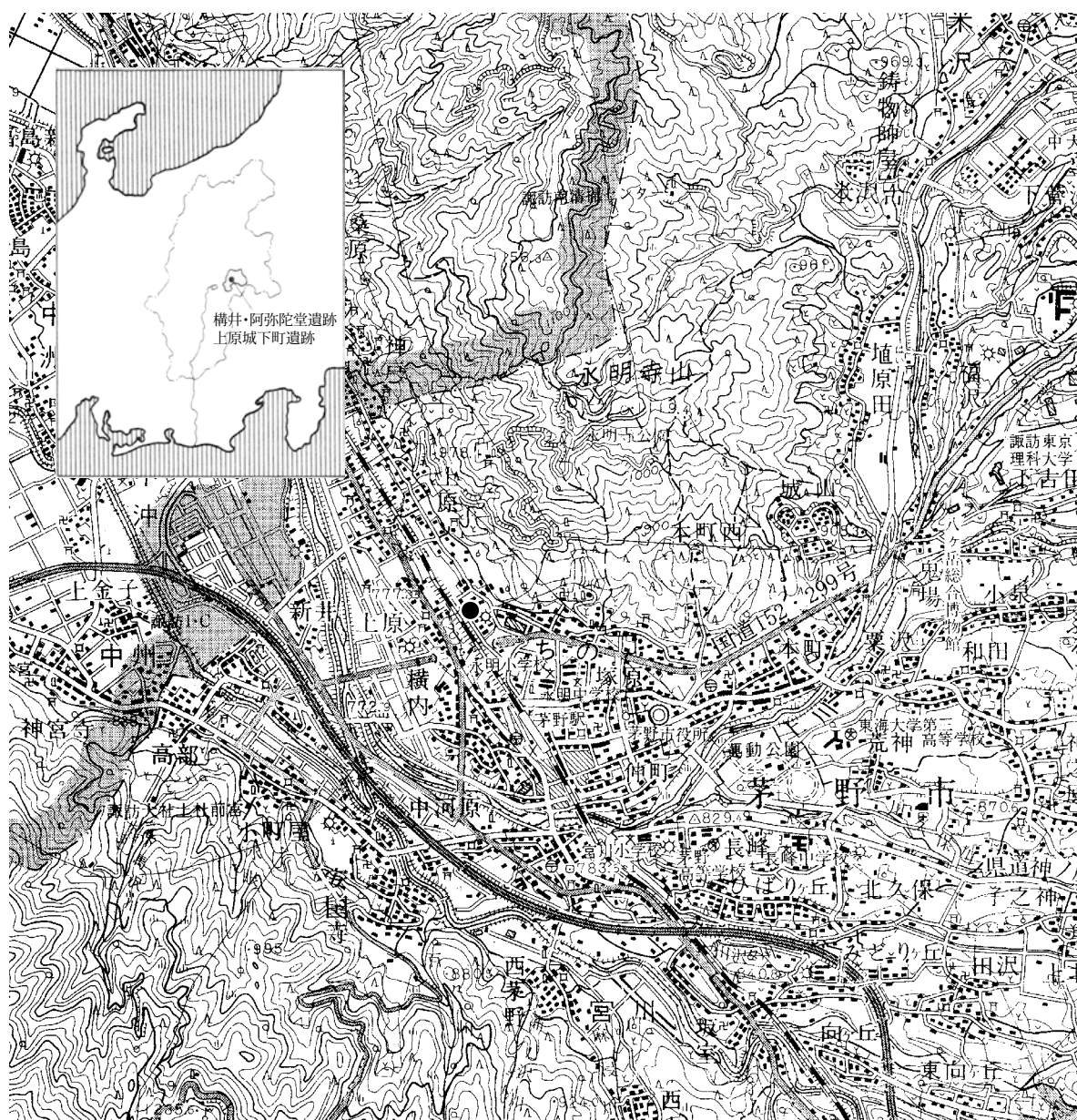
目 次

第 1 章 発掘調査の経過と経緯	1
第 2 章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第 1 節 茅野市の地形概要	3
第 2 節 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第 3 章 発掘された遺構と遺物	4
第 1 節 住居址	4
第 2 節 土坑	13
第 3 節 その他の遺構	13
第 4 節 遺構外出土の遺物	15
第 4 章 発掘調査の成果と課題	15
写真図版	
抄録	

第1章 発掘調査の経過と経緯

平成25年度に構井・阿弥陀堂遺跡隣接地の市道内における、茅野市白樺下水処理場廃止に伴う諏訪湖流域下水道編入のための下水道工事の計画の通知を受け、諏訪建設事務所との保護協議に入った。計画地周囲の調査歴に乏しく、工事には大規模な掘削を伴うものから事前に試掘調査を行うこととした。平成25年12月19日～20日にかけて試掘調査をした結果、平安時代の竪穴住居址を検出した。遺構が確認されたことから、さらに範囲を確定させ、工事との調整を図るために道路東へ向かって平成26年1月22日～24日にかけて更に試掘調査を行った。遺構の範囲を特定し、再度、諏訪建設事務所と協議した結果、工事に入る前に発掘調査を行うことで同意を得た。

平成26年5月26日諏訪湖流域下水道工事工区内に該当する構井・阿弥陀堂遺跡、上原城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、工区内を発掘調査することとなった。調査にあたっては交通に支障をきたしてしまうため、隣接して行われる下水道工事に合わせて通行止めをすることで周辺住民への支障を少なくする



第1図 調査遺跡位置図 (1/10,000)

ため、下水道工事の進捗に合わせて調査区間を2つに分けて行った。調査区間①は片側交互通行とし、6月9日より調査を開始、7月4日に終了した。調査区間②は全面通行止めにし、9月26日より調査を開始、10月31日に終了した。

報告書作成については他事業との調整が困難であったため、諏訪建設事務所と協議した上で平成27年度に報告書作成業務委託契約を締結し、報告書を刊行することとした。

発掘調査の経過（抄）

第一期

6月9日（月） 調査機材・重機搬入、掘削開始。基準点設置・測量

6月10日（火） 調査開始

6月30日（月） 埋戻し、調査機材・重機撤収

7月1日（火） 調査箇所不陸整正

7月4日（金） 舗装工事

第二期

9月24日（水） 重機搬入

9月26日（月） 掘削開始、基準点設置・測量

10月31日（火） 埋戻し、調査機材・重機撤収

調査の方法と経過

（1）遺跡名について

構井・阿弥陀堂遺跡は平成18年度版の『茅野市遺跡分布図』（2006年）で構井遺跡と阿弥陀堂遺跡とで分けられ、さらには上原城下町遺跡とも遺跡範囲としては分断されていた。しかし、近年の調査から構井遺跡と阿弥陀堂遺跡の明確な区分はできず、修正を重ねる内に、上原城下町遺跡とも繋がること明らかとなってきた。そのため、近年の調査では便宜上、構井・阿弥陀堂遺跡と呼称し、上原城下町遺跡との堺は不確定であり、遺跡としては同一のものとして捉えている。そのため、今回の調査においては地図上での場所による遺跡名の使い分けは有るものの、これら3遺跡について、遺跡として捉える中では分別しないものとする。

（2）表土の掘削と遺構の検出

調査に際して、表土・道路敷設時の造成土の除去には0.28m³級のバックホウを用いた。道路敷設の改良が加えられた層の下からは、水田土が確認できた。北から南へ緩やかな傾斜を持っているこの場所は、段々状の水田であった事が明らかになったと同時に、水田の下には遺構が残存していることも確認できた。そのため、昔の水田造成の土の移動も多少見られたものの、水田土までを目安に重機にて掘削を行い、その後、手堀りによる遺構検出に努めた。

（3）写真と測量

現場での写真による記録は35mmカラー・白黒・リバーサルフィルムを使用し、補助としてデジタルカメラを使用した。平面図・断面図の基準となる測量杭は道路脇側溝上におよそ3.6mおきに打設し、世界測地系により座標化した。遺構の図面及び断面図の縮尺は1/20、遺構全体図は1/100で作成した。平面図は平板測量で作成している。

（4）整理作業

平成27年5月より本格的な整理作業を開始した。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 茅野市の地形概要

茅野市は長野県南東部の諏訪地域に位置する。諏訪地域の地勢は、北側が諏訪湖（759m）を中心とする「湖盆」と呼ばれる平地、南側が八ヶ岳火山列・霧ヶ峰山塊とその麓に発達した台地・扇状地・谷などからなる山地に大きく分けられる。この平地と山地に跨って、諏訪地域の南東部、265.88km²を占めるのが茅野市域である。

茅野市は、東を主峰赤岳（2,899m）に連なる2,000m台の山からなる八ヶ岳火山列、北を車山（1,925m）から西へ続く霧ヶ峰高原の山塊、西を赤石山脈の北端となる守屋山・入笠山塊（守屋山1,650m）に囲まれている。そのため市域の大部分は山地となる。三方を囲む山なみの麓には湧水や小河川による浸食・堆積作用で台地や扇状地が発達し、これらの高まりに点々と集落が営まれている。山麓の削った大量の土砂は、市内を流れる上川と宮川の二大河川によって諏訪湖方面へ運ばれ、市域の北西部に、湖盆に続く沖積段丘面および沖積低地を形成する。こうしてできた標高に対して800m前後の平地一帯に茅野市街地が広がっている。平成28年2月1日現在の人口は55,375人である。

以上に記した市域の地形は、守屋山・入笠山塊の東の裾を西縁とする糸魚川―静岡構造線の断層活動と、その後生じた隆起や火山活動によって形成されたものである。約2,300万年前に始まったとされる糸魚川―静岡構造線の活動によって、東側の地域は大きく陥没した。この広大な落ち込みがフォッサ・マグナ（大地溝帯）と呼ばれている。ここに日本海と太平洋から海水が流入し、砂や泥が厚く覆うとともに海底火山に伴い噴出した岩石が堆積した。やがてこれらの堆積物が隆起し、守屋山が生まれることとなる。約250万年前になるとフォッサ・マグナの各地で火山活動がさかんとなり、約130万年前から約1万年前までに霧ヶ峰・車山山塊や八ヶ岳山列が形成されていく。この過程の中で本州最大の黒曜石原産地が生成したとされる。これらの火山活動と並行して、約100万年前からフォッサ・マグナの西縁付近で断層活動が進行し、約30万年前に現在の諏訪盆地と諏訪湖が形成したといわれている。このように市域の地形は、糸魚川―静岡構造線の活動以降さまざまな大地の動きによって、長い時間をかけて形づくられたものである。

こうしてできた変化に富んだ地形が、豊かな山・川の幸を育み、また地形の形成過程において利器の材料に最適な黒曜石を身近な場所にもたらすこととなった。このような自然環境の備わった茅野市域は、縄文時代の人々が生活を営む上で最適な場所であった。これを裏付けるように、200箇所以上もの縄文時代の遺跡が八ヶ岳火山列や霧ヶ峰山塊の麓を中心に残されている。

第2節 遺跡の地理的・歴史的環境

遺跡の地理的環境

隣り合う二遺跡は、霧ヶ峰山塊の南縁を形成する永明寺山（1,156m）の南西に位置する。永明寺山は花崗閃緑岩山で構成されているが、この地の花崗岩は非常に脆いのが特徴である。山裾より南にある上川沖積地に向かって広がる平坦な段丘面上に存在し、JR中央線と国道20号線に沿って長く伸びる。行政区上では構井・阿弥陀堂遺跡は塚原区とちの区、上原城下町遺跡はちの区にあたる。いずれの地区も現在は市街地化し、住宅の建築が進んでいる地域である。

遺跡の歴史的環境

二遺跡周辺は縄文時代から近世に渡って遺構・遺物が確認されている遺跡である。また、北は上田・佐久方面に通じる大門峠、南は伊那方面に通じる杖突峠が通り、西は諏訪・塩尻、東は山梨方面と各地を繋ぐ道の交わる地域に位置している。古くから人の往来があったのか、弥生時代以降、八ヶ岳寄りに集落を営んでいた縄文時代とは違って変わって、市内でも標高の低い構井・阿弥陀堂遺跡一帯に住居址が多数見つかっている。代表的なのは構井・阿弥陀堂遺跡のすぐ近くで、段丘下にある家下遺跡からは環濠集落や方形周溝墓も見つかっ

ている。古墳時代になると茅野市内では数多くの古墳が築造されたが、住居址の検出例は少ない。しかし、その少ない検出例のほとんどは構井・阿弥陀堂遺跡、上原城下町遺跡、家下遺跡で占められている。奈良時代については極端に検出例が少なく明らかとなっていない。弥生時代、古墳時代と二遺跡周辺一帯が中心地であり、平安時代以降になってもそれは変わっていない。奈良時代であっても立地の良さや集落の継続性からも人が生活していたと思われるが、早くから市街地化が進んだこともあり、調査が進んでいないのが現状である。平安時代には永明寺山南麓や守屋山山麓に比較的大きな集落が出現し、構井・阿弥陀堂遺跡ではこの時期に遺構の数が最も多くなり、八稜鏡が4面出土するなど、中心地的役割を担っていたことが想像される。中世になると上原城を中心とした城下町として栄え、広い範囲で人が生活していたことが近年の調査の蓄積から明らかになってきている。

調査史

二遺跡はともに遺跡範囲が広く、市街地にも近いことから近年開発が進められている場所である。構井・阿弥陀堂遺跡は昭和57年に茅野有料道路建設に伴う発掘調査以来、集合住宅建築工事や店舗建築、県道新設工事といった広い範囲の開発を中心に進み、縄文・弥生・平安・中世の住居址が多数見つかり、断続的に集落が営まれていたことが明らかになってきている。

上原城下町遺跡は諏訪惣領家の本拠地とした上原城を中心とした中世城下町として政治経済の中心地として発展した。上原地区一帯からは広く遺物が出土することから広範囲に亘って埋蔵文化財包蔵地として捉えられており、文献資料や今でも残る字名や小路名と合わせることで、城下町としての様子を伺うことができる。しかし、近年の住宅建設の増加に伴い、細かい調査が蓄積されているが、住宅が密集していることもあり、生活道路や上下水道等で既に乱されている場所も多く、全体として遺跡をとらえることが難しくなっている。

詳細な調査歴・調査成果については構井・阿弥陀堂遺跡については「阿弥陀堂遺跡Ⅶ」（2008）、上原城下町遺跡については「上原城下町遺跡Ⅲ」（2009）で記されているため省略する。

第3章 発掘された遺構と遺物

今回の調査では、平安時代の住居址4軒、時期不明1軒、土坑9基、溝址2条、方形竪穴1基が検出された。調査箇所は後の水田耕作や下水道管理設工事等により大きく遺構面を削られていた。また、幅約1.5mと限られた調査であったため、遺構の確認・判断は困難を極めた。

第1節 住居址

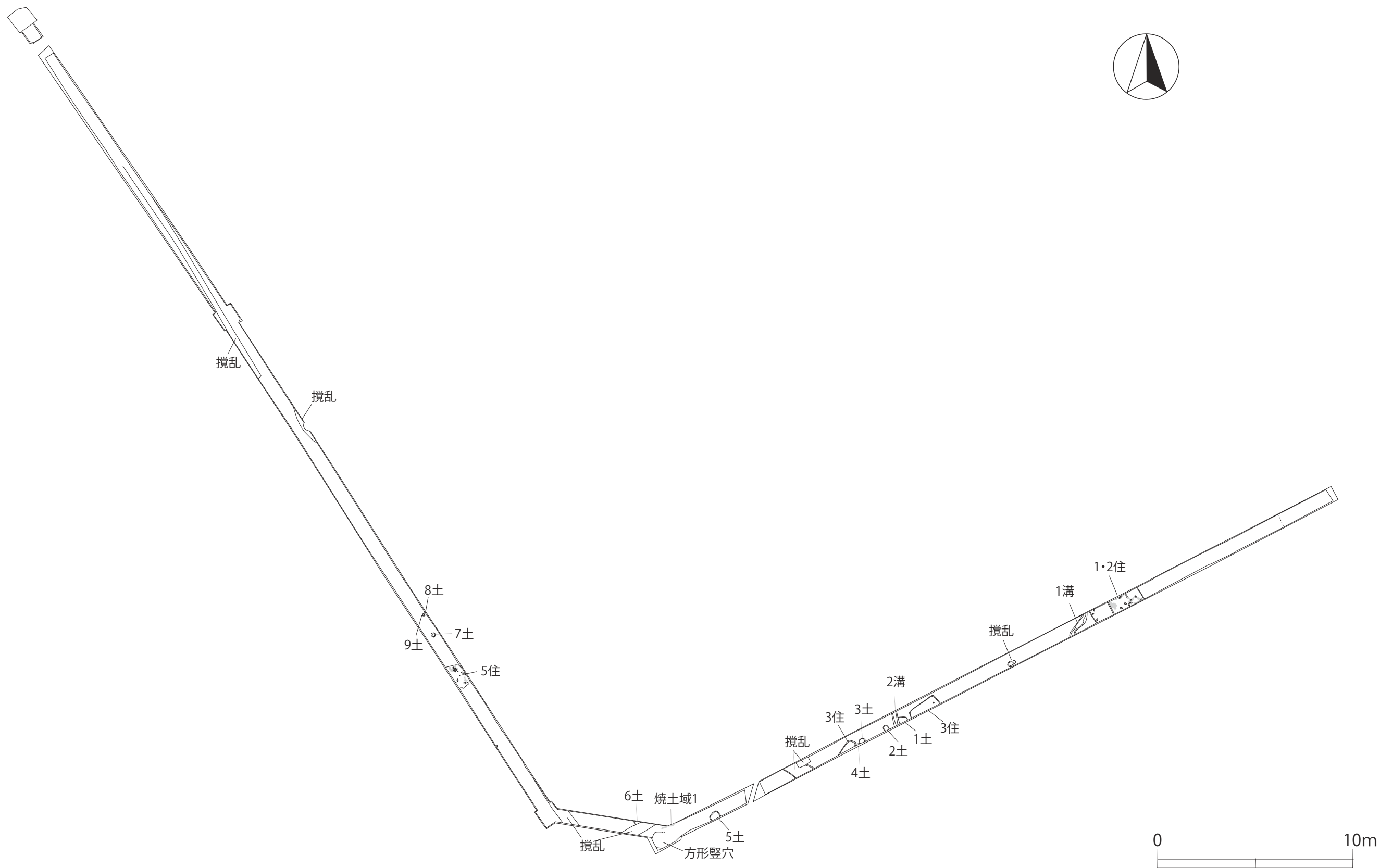
1号住居址（第4・5図、図版1-1）

第一期調査区北東で黒色土落込みの中に広い範囲で焼土と礫が検出されたことで確認された。掘り下げ、精査することでようやく2軒の住居址が重なっていることが把握できた。床らしい硬い面は確認されなかったが、北東に向かって広げていき立ち上がりを確認した。遺構のほとんどは2住のものと思われる焼土が広がり、2住により壊されているものと見られる。

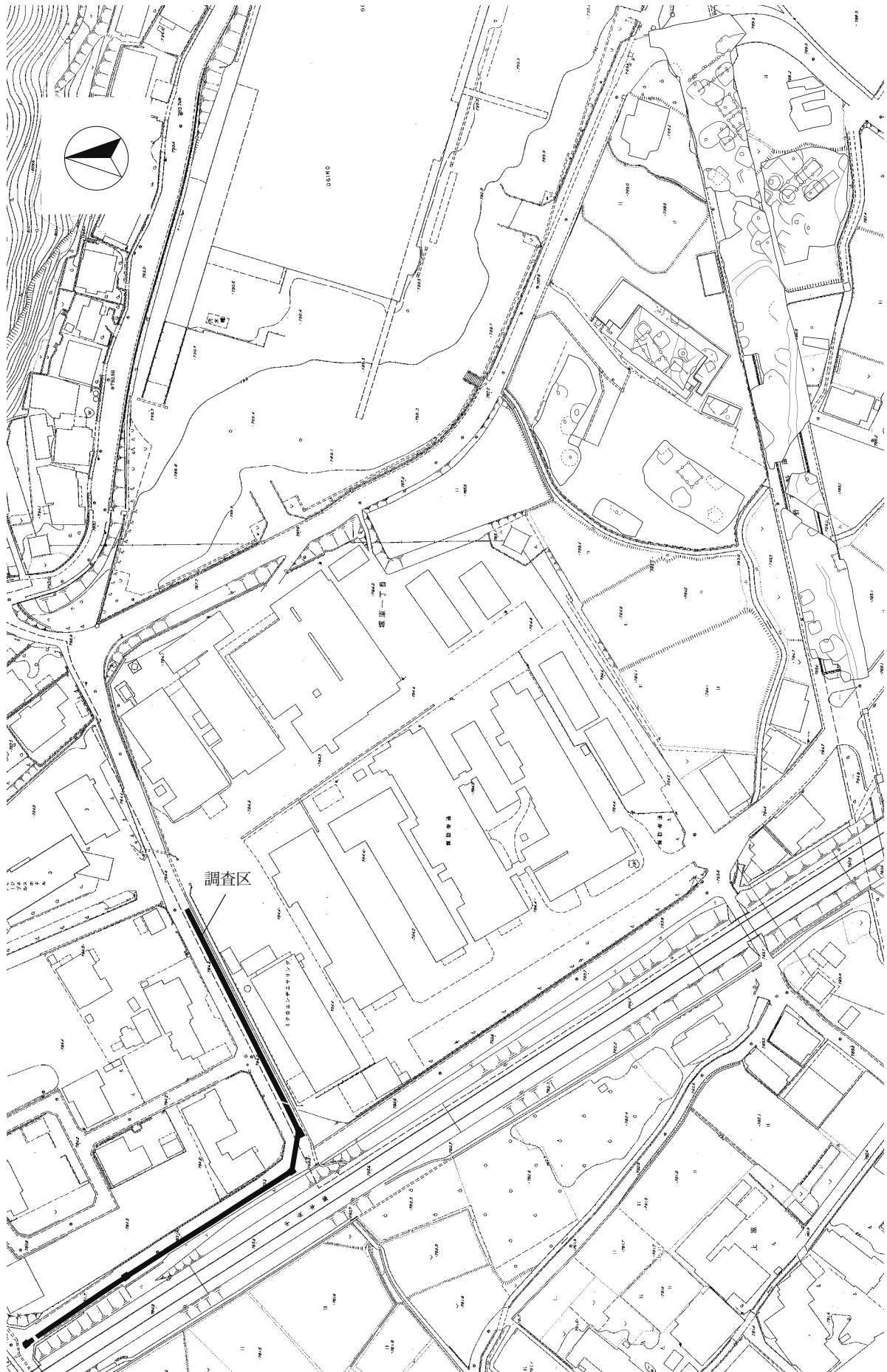
住居の重なりを見極めるのが難しく、2住と遺物を分けることができなかった。

2号住居址（第4・5図、図版1-1・3-6）

1住と同様に遺構検出で精査して確認された。遺構東側に広く焼土が広がる。西側の立ち上がりは確認できたが、東側は1住と重なりにより捉えることができなかった。焼土が厚く残る箇所では20cm～30cm大の礫が混ざり、南東に向かって伸びていく様子が伺えたことから、2住のカマドと捉えた。床と思われる硬い面も確認でき、貼床されている箇所も見られた。1住同様、柱穴らしい土坑はみられない。カマドが広く残っていることから1住より新しい住居と考えられるが、遺物の時期に開きがないことから1住、2住の時間差はそれほどない



第2図 遺構全体図(1/400)

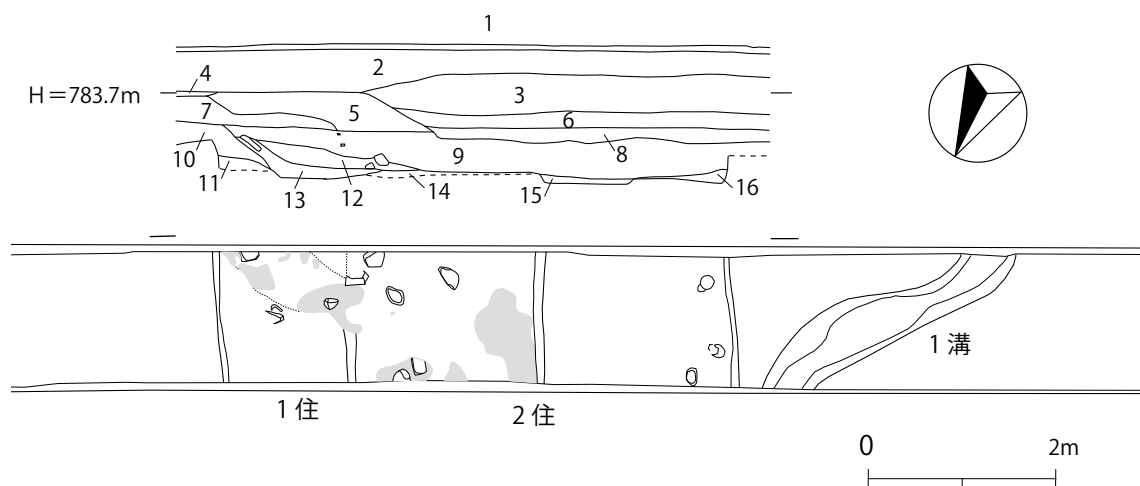


第3図 調査位置と周辺の調査歴

と思われる。

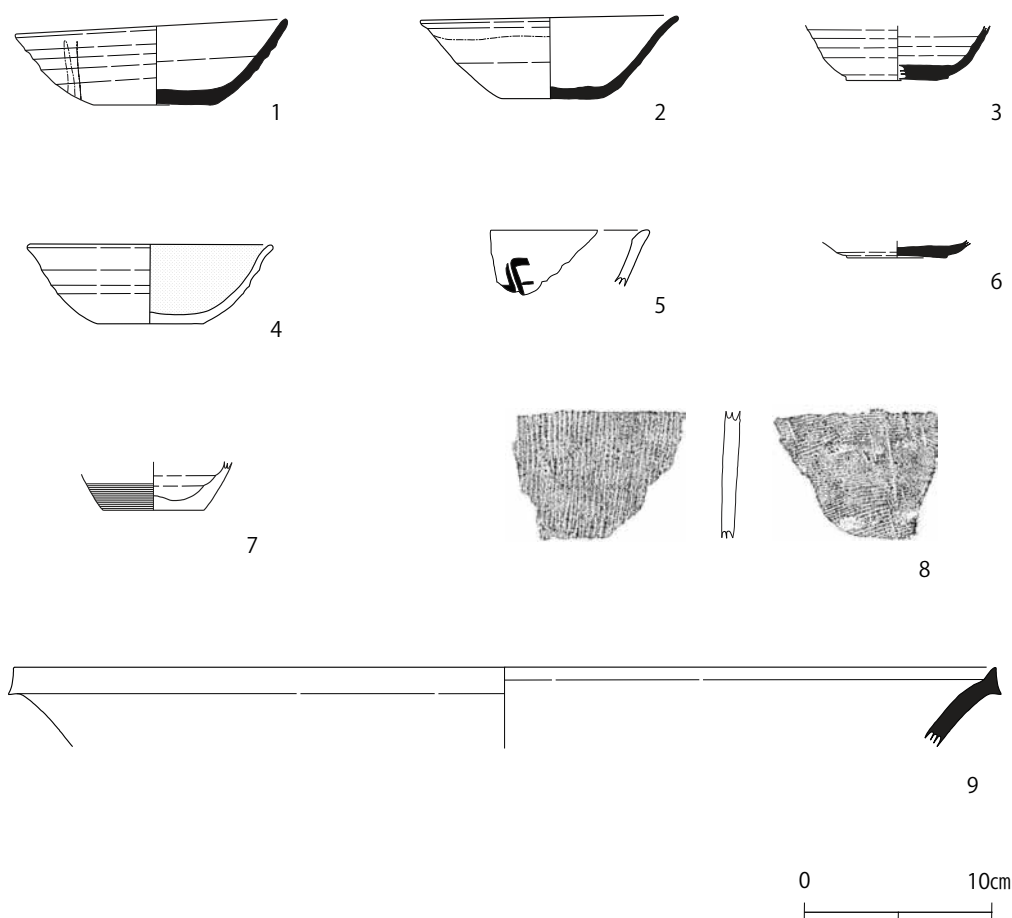
西側壁付近からは須恵器坏2点が出土しているほか、多数の土器片や墨書土器が出土している。1～4は須恵器坏である。1の外面に火礫が残る。2は焼成が粗悪で口縁部が外形する。3・6は底部をわずかに残してロクロ糸切りしている。床面から出土している。4・5は黒色土器である。6は口縁のみであるが外面に墨書が残る。文字は判読できない。7・8は土師器甕である。7は小型の甕の底部である。外面にはカキ目が施される。8は甕胴部の破片であるが、内面は横方向のハケ目、外面には縦方向のハケ目が施される。9は須恵器甕の口縁である。

出土土器から2住は9世紀後半の時期と推定され、1住も同様の時期と考えられる。



- 1 道路アスファルト
- 2 道路採石
- 3 道路造成土
- 4 水田土
- 5 水田畦
- 6 水田土
- 7 水田造成土
- 8 旧水田跡
- 9 10 Y R 2/2 黒 粘性 1～5cm大礫 5%、5mm以下の炭化物 1%、1mm～1cm大焼土塊 7%
- 10 10 Y R 2/1 黒 粘性 5mm以下石粒 5%、5mm以下炭化物 1%
- 11 10 Y R 1.7/1 黒 粘性 1mm以下石粒 1%
- 12 10 Y R 2/1 黒 粘性 1mm以下石粒 3%、1mm～5cm大ローム塊 15%、被熱を受けた5～15cm大の礫混じる
- 13 10 Y R 2/3 黒褐 粘性弱 1～3cm大礫 3%、1mm～5cm大焼土塊 40%、被熱を受けた20cm大の礫混じる
- 14 10 Y R 2/3 黒褐 砂質 10cm大礫 30%、被熱を受けた礫も混じる
- 15 10 Y R 4/4 褐 砂質 堅くよく締っている
- 16 10 Y R 2/3 黒褐 締まりがない

第4図 1・2号住居址 (1/80)



第5図 1・2号住居址出土遺物 (1/4)

3号住居址 (第6図、図版1-2)

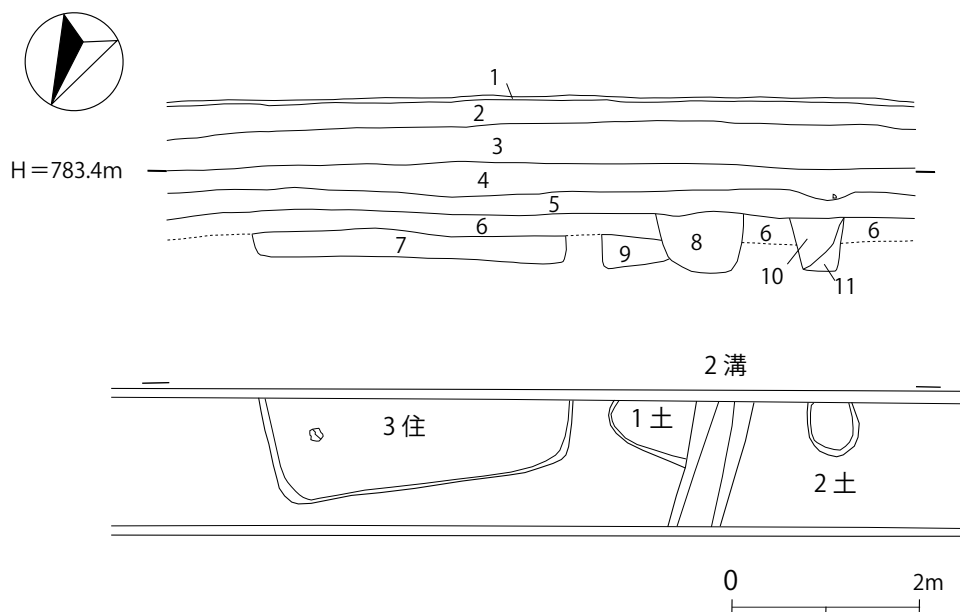
第一期調査区中央付近で黒色土の落込みが発見され、土坑とともに検出された。壁の立ち上がりも確認でき一辺が3.0mを図る。方形のプランとみられるが、遺構が調査区外へ伸びるためプランのみの確認に留まった。柱穴らしい土坑や焼土はみられなかった。

図示できる土器は少ないが1の土師器坏と灰釉陶器の皿が出土している。1は底部のみでわずかな高台がつけられている。2は残存状態がいい。灰釉皿から10世紀後半～11世紀前半の時期を想定する。

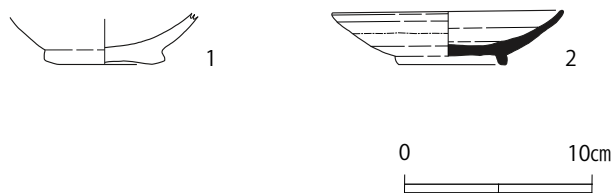
4号住居址 (第7図、図版1-3)

第一期調査区3住の南西で黒褐色土内に同系色の落込みが発見され、土坑が重なったものとみて精査した所、直線的な色の違いが捉えられ、住居のコーナーであることが判明した。掘り下げを行い、壁の立ち上がりも捉えられた。

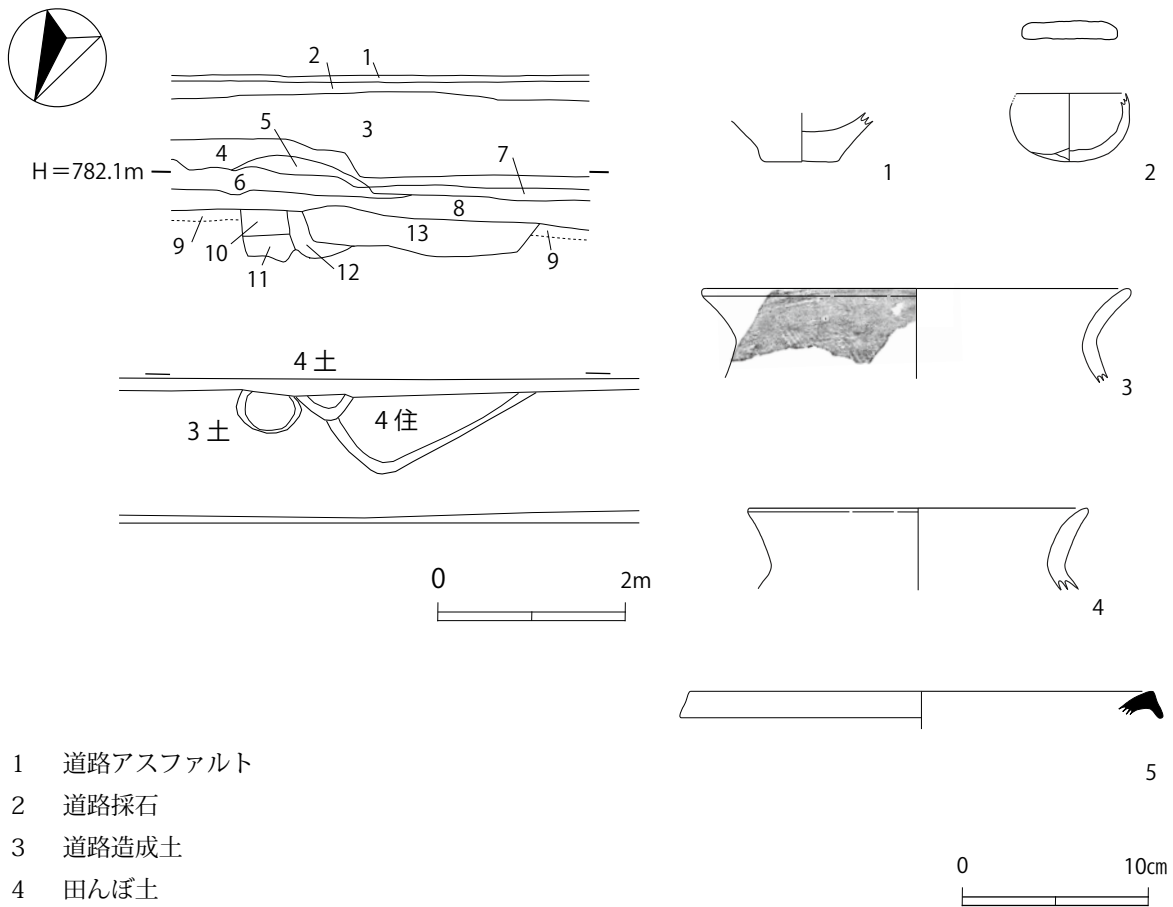
時期の特定にいたるような遺物は少ない。1～4は土師器、5は須恵器である。1は高台気味の皿もしくは碗とみられる。2は粗製の手づくね土器で小型の蓋と坏のセットである。コーナー付近から出土している。3は甕で口縁部のみだが頸部に斜めの櫛掻きがわずかにみられる。4も甕で胴部に櫛掻きがみられる。5は甕で外湾した口縁部が僅かに残る。



- 1 道路アスファルト
- 2 道路採石
- 3 道路造成土
- 4 水田土
- 5 水田造成土
- 6 10 Y R 2/1 黒 粘性 1mm以下石粒 8%、締まりが弱い
- 7 10 Y R 1.7/1 黒 粘性 5mm～1cm大石粒 5%、1～5cm大礫 3%、1cm以下ローム塊 3%、締まりが弱い
- 8 10 Y R 2/2 黒褐 粘性弱 1mm以下石粒 7%、1mm～3cm大ローム塊 10%、よく締っている
- 9 10 Y R 2/2 黒褐 粘性 1～5cm大礫 3%、1cm以下ローム塊 5%、よく締っている
- 10 10 Y R 1.7/1 黒 粘性 1mm以下石粒 3%、1cm以下ローム塊 3%、よく締まっている
- 11 10 Y R 2/3 黒褐 粘性 1mm以下石粒 5%、5mm～3cm大ローム塊 30%、よく締っている



第6図 3号住居址 (1/80) と出土土器 (1/4)



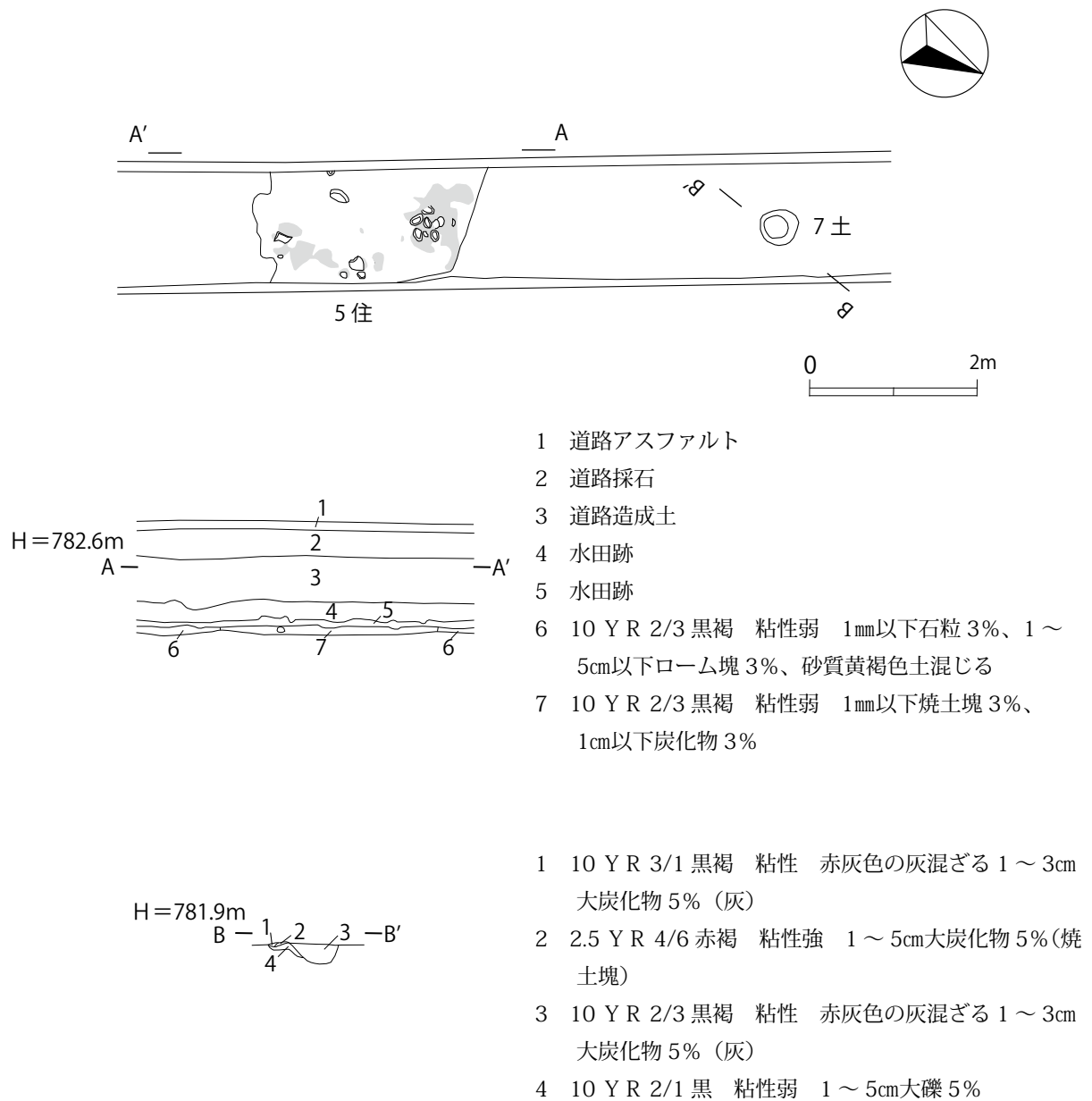
- 1 道路アスファルト
- 2 道路採石
- 3 道路造成土
- 4 田んぼ土
- 5 水田畦 (10 Y R 2/2 黒褐 粘性 1mm以下石粒 7%、3cm大礫 1%)
- 6 水田造成土
- 7 水田床土
- 8 10 Y R 2/1 黒褐 粘性 1mm以下石粒 5%、1cm大礫 3%、締まり弱い
- 9 10 Y R 2/1 黒褐 粘性 1mm以下石粒 3%、締まり弱い
- 10 10 Y R 1.7/1 黒褐 粘性 5mm以下石粒 7%、1cm大焼土塊 3%、1cm以下ローム塊 15%、3cm以下炭化物 1%
- 11 10 Y R 1.7/1 黒褐 粘性 1cm以下石粒 1%、1～5mm大焼土塊 5%、1mm以下ローム塊 3%
- 12 10 Y R 1.7/1 黒褐 粘性 1mm以下石粒 7%、1cm以下ローム塊 10%、1～5cm大ローム塊 3%
- 13 10 Y R 2/2 黒褐 粘性 1mm以下石粒 1%、1cm以下ローム塊 15%、1mm大炭化物 1%

第7図 4号住居址 (1/80) と出土遺物 (1/4)

5号住居址 (第8図、図版2-4・3-7)

第二期調査区南東側で広く焼土が見られたため精査して確認された。遺構の境が捉えにくかったが、掘り下げた所、住居内前面に渡って焼土が広がっていることが判明した。明確な立ち上りは捉えられなかったが、中央がやや窪んだ硬く締まった箇所が面で捉えられたことから住居址とし、プランを把握した。土坑は無く、一辺が2.5mほどのである。こうした出土状況から住居址としているものの、馬屋などの建物を想定する。

出土遺物が少なく、図示できなかった。時期は不明である。



第8図 5号住居址 (1/80) と出土遺物 (1/4)

第2節 土坑

全体で9基土坑が検出されている。

1号土坑(第6図)

平面形態は長円形と見られるが、大きさは不明。深さは14cmを測る。断面は柱穴状を呈する。2溝址に切られる。

2号土坑(第6図)

平面形態は遺構外に伸びるため不明だが径50～55cmの不正円形又は長円形とみられ、深さは31cmを測る。断面は柱穴状を呈する。

3号土坑(第7図)

平面形態は径30cmの不正円形で、深さは34cmを測る。断面は柱穴状を呈する。4土との切り合い関係は掴めない。

4号土坑(第7図)

平面形態は大半が調査区外に伸びるため不明。深さは41cmを測る。断面は柱穴状を呈する。4住を切っており4住より新しいとみられる。

5号土坑(第9図)

平面形態は1辺44cmの不正方形とみられ、深さは27cmを測る。断面は柱穴状を呈する。

6号土坑(第9図)

平面形態は調査区外及び既設下水道により不明。深さは6cmを測る。断面は柱穴状を呈する。

7号土坑(第8図、図版3-8)

平面形態は径40～45cmの不正円形で、深さは23cmを測る。断面は皿状を呈する。隣接して約径10cmの焼土域が付随する。

8号土坑

調査区外に伸びるため、平面形態は不明である。深さは21cmを測るが、遺構外は既設下水道による大きな攪乱を受けており正確な値は不明。断面は柱穴状を呈する。9土と切り合っているが9土より新しいとみられる。

9号土坑

平面形態は径30cmの不正円形で、深さは11cmを測る。断面は柱穴状を呈する。8土と切り合っているが8土より古いとみられる。

第3節 その他の遺構

1号焼土(第8図)

方形竪穴とともに確認された。部分的に焼土がかたまっており、周囲に細かく飛んでいる。方形竪穴に関連した遺構と思われる。

1号溝址(第4図)

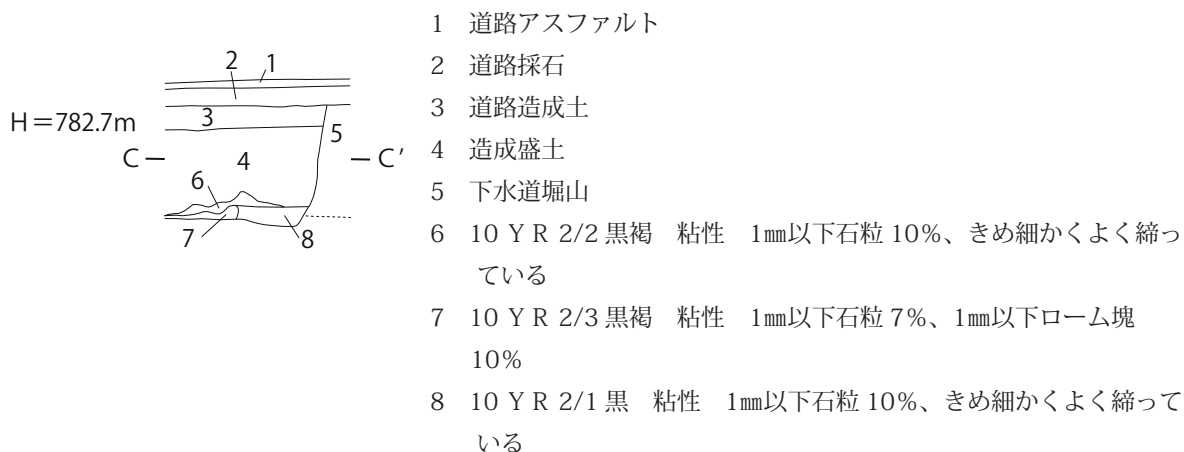
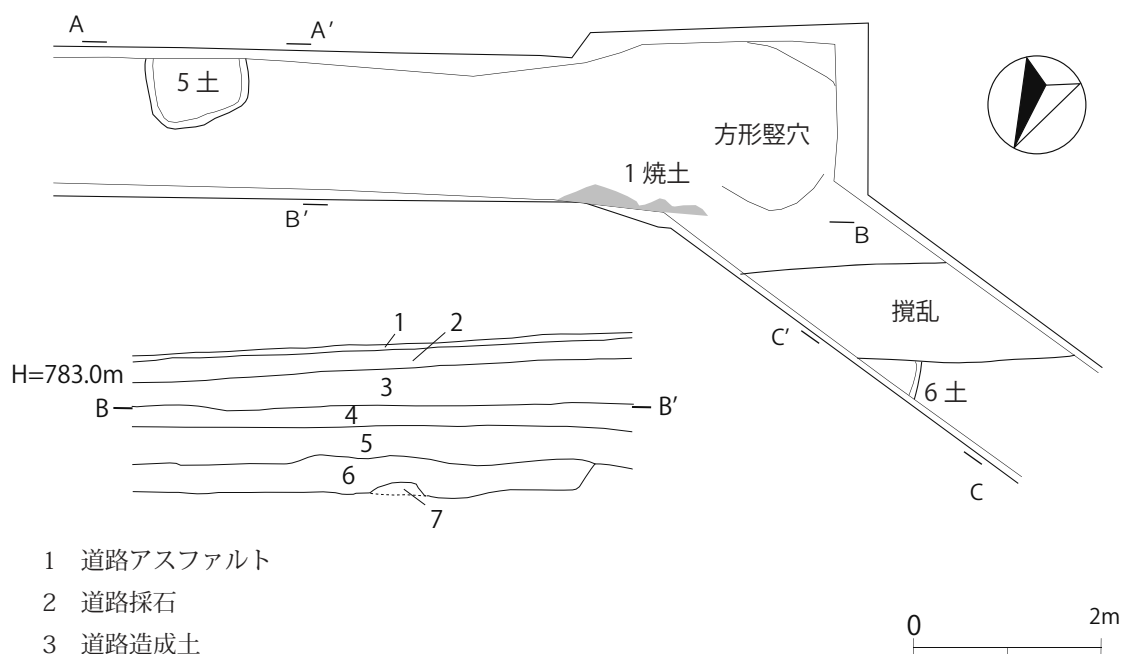
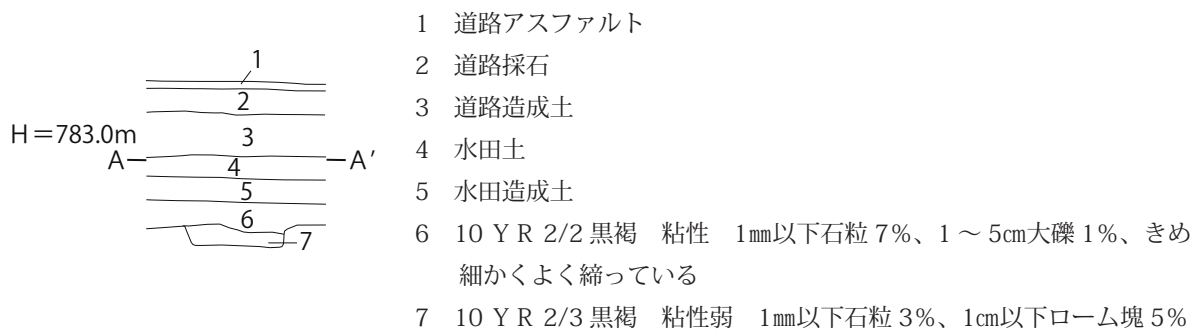
1・2住とともに確認された。北東と南西方向に蛇行しながら伸び、幅20～35cm、深さ10cmを図る。

2号溝址(第6図)

1土とともに確認された。掘り下げて切り合い関係を確認し、1土を切っているとみられる。南北方向に伸び、幅51cm、深さ32cmを図る。

方形竪穴(第9図、図版2-5)

第一期調査区南西端で確認された。遺構上部は既に乱されており、遺構下部がかろうじて残っている程度で覆土がほとんどない状況であった。壁の断面には表れておらず平面でわずかに床からの立ち上がりを捉えた。住居址の可能性も考えられるが判然としない。



第9図 方形竪穴、5・6土 (1/80)

第4節 遺構外出土の遺物

遺構外からも黒曜石や古墳時代の土師器など出土しているが破片が小さく図化できなかった。黒色土器片が単体で遺構外から出土している。

第4章 調査の成果と課題

今回の調査では細い範囲を長く調査したため、ほとんどの遺構を完掘することができなかった。ただ、既に工場や住宅が建てられており、これまで調査することができなかった場所かつ埋蔵文化財包蔵地図の遺跡と遺跡の境にあたる場所を広く範囲に渡って調査できたことは大きな成果と考える。遺跡を跨ぐ形で調査を行い、これまで修正を加えながら包蔵地図として、構井・阿弥陀堂遺跡と上原城下町遺跡は接すると考えていたことを裏付ける結果となった。

確認された遺構は住居址5軒、土坑9基、溝址2条、方形竪穴1基であるが、そのほとんどは平安時代と考えられる。そのため、遺跡の性格としては、構井・阿弥陀堂遺跡に属するものと思われる。平成19年に行われたⅦ次調査までの調査でも、平安時代の住居が多数確認されている。時期の判明するものでは「8世紀前半1軒・中葉1軒・後半3軒・8世紀末～9世紀前半1軒・9世紀前半1軒・後半9軒・10世紀前半1軒・後半2軒・11世紀前半4軒・後半3軒・11世紀1軒・11世紀末～12世紀1軒である。」(柳川2008)と集成している。今回の調査では住居址に関して、1・2号住居址は9世紀後半、3号住居址は10世紀後半～11世紀前半、4号住居址は9世紀代、5号住居址は時期不明である。構井・阿弥陀堂遺跡として集落が最盛期を迎えたと考えられている9世紀後半においては数だけでなく、広範囲に渡って集落が営まれたことが今回の調査から明らかになったと思う。

また、今回の出土遺物の中で特筆すべきは4号住居址から出土した蓋つきの手づくね土器坏が挙げられる。小型で蓋が被さった状態で出土した。蓋と坏では胎土も似ており一緒に作られたと思われる。市内での類例としては、これよりも大きく精巧に作られた小壺が平安時代の土坑墓から出土している。当調査では住居址としたが、部分的な検出であったことから、土坑墓となる可能性も考えられる。

調査地周辺は駅に近いこともあり、工場や中央本線、宅地等の開発が早くから進んだ場所であった。近隣住民の方からは調査地周辺は大規模な造成をしているため、遺跡はあっても既に失われているとの話を伺っていた。しかし、調査してみると道路下も古い水道管や既設下水道管により深くまで掘削が及んでいたものの、遺構が残されていることを確認できた。今後も市街地周辺での調査には細心の注意を払い、調査成果の集積と遺跡・歴史としての解明に取り組んでいきたい。

<参考文献>

- 鵜飼幸雄・守矢昌文 1983『高部遺跡－静香苑侵入道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告－』茅野市教育委員会
- 守矢昌文 1983『構井・阿弥陀堂遺跡－茅野市有料道路内埋蔵文化財発掘調査報告－』茅野市教育委員会
- 小平和夫 1990「第3章 遺構・遺物の考察 第5節 古代の土器」長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道 長野県埋蔵文化財発掘調査報告書 4－松本市内その1－総論編』日本道路公団長野建設局・長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター
- 小林深志 1993『阿弥陀堂遺跡－埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』茅野市教育委員会
- 功刀 司 1994『阿弥陀堂遺跡Ⅴ－平成5年度埋蔵文化財第5次緊急発掘調査報告書－』茅野市教育委員会
- 守矢昌文・柳川英司 2008『阿弥陀堂遺跡Ⅶ－平成19年度 宅地造成および集合住宅建築工事に伴う緊急発掘調査報告書－』茅野市教育委員会
- 藤原直人 2008『（都）大年線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－茅野市内－構井・阿弥陀堂遺跡』長野県諏訪建設事務所 長野県埋蔵文化財センター
- 山田武文 2008「第四章 遺物、第Ⅴ章 5. 榎垣外遺跡の土器編年－奈良・平安時代の変容」『榎垣外官衙遺跡』岡谷市教育委員会
- 小池岳史・小林深志、・塩澤恭輔 2015『市内遺跡』茅野市教育委員会



1 1・2号住居址(南西より)



2 3号住居址・1・2号土坑・1号溝址(北東より)



3 4号住居址・3・4号土坑(南東より)

図版 2



4 5号住居址(北東より)



5 方形竪穴址(南西から)



6 2号住居址焼土域(南西より)



7 5号住居址焼土半截(西より)



8 7号土坑半截(西より)

図版 4



9 作業風景①(北より)



10 作業風景②(南より)



11 作業風景③(西より)

報告書抄録

ふりがな	かまい・あみだどういせき うえはらじょうかまちいせき							
書 名	構井・阿弥陀堂遺跡・上原城下町遺跡							
副 書 名	平成26年度 諏訪湖流域下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名	塩澤恭輔							
編 集 機 関	茅野市教育委員会							
所 在 地	〒391－8501 長野県茅野市塚原二丁目6番地1号 TEL0266－72－2101							
発行年月日	西暦2016年3月7日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かまい・あみだどう 構井・阿弥陀堂 うえはらじょうかまち 上原城下町	ちのしつかはら 茅野市塚原 ちのしちの 茅野市ちの	20214	222・223 224	36° 0′ 3″	138° 8′ 50″	2014.6.9 } 2014.10.31	405㎡	下水道管布設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かまい・あみだどう 構井・阿弥陀堂 うえはらじょうかまち 上原城下町	集落	平安時代	平安時代 住居址 4軒 不明 住居址 1軒 溝址 2条 方形竪穴 1基 土坑 9基	縄文時代 縄文土器・黒曜石 弥生時代 弥生土器 古墳時代 土師器 平安時代 土師器・須恵器・手 づくね土器・灰釉陶 器	・時期差のある平安時代の住居址が 検出され、集落の広がりが伺える。 ・遺跡の性格としては構井・阿弥陀堂 遺跡に近いとみられる。
要約	今回の調査では、構井・阿弥陀堂遺跡と上原城下町遺跡の二遺跡にまたがる調査となった。平安時代の遺構が多く、市内でも大規模な平安時代の集落の広がりを把握できた調査となった。				

構井・阿弥陀堂遺跡

上原城下町遺跡

－平成 26 年度 諏訪湖流域下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 28 年 3 月 2 日 印刷

平成 28 年 3 月 7 日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 長野県茅野市塚原二丁目 6 番 1 号 (0266) 72－2101(代)

印刷 永明社印刷所

長野県茅野市塚原 2 丁目 12 番 30 号